

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 出典の文章は、北川東子「歴史の必然性について—私たちは歴史の一部である」からの抜粋（約2,931字）である。「歴史とはなにか」という問いを起点として、「歴史」とその認識主体（私）との関係を論じた文章である。出題箇所では、これまでの歴史家たちがどのように「歴史」と向き合ってきたのかを考察し、歴史に対する『自分の不在』の意識を前提とした歴史学の言説の成立を、著者は歴史に対する「ゆるい関心」と名づけている。また、出題箇所の末尾では、観察者として歴史に関わろうとすることは、「歴史との正しい関わり方」なのかという問いを提起し、そうした関わり方の限界についても言及している。

多くの受験者にとって「歴史」は学校教育の中で「知識」として学習することが多いため、まさに自己の外部として理解されてきたと思われる。しかし、著者の論考を丁寧に読み取らせることによって、そうした歴史認識は絶対的なものではなく、「歴史」は今を生きる私たちにとって必要であるとする著者の主張に理解が及ぶよう、問題を設定した。問1は漢字や字義に関する問題、問2～問5は本文の読解に関する問題とした。問6は、生徒が本文を読み直し「文章を書く上での技術や工夫」について文章にまとめるという課題場面を設定し、それを具体的に修正する文章作成能力を問うている。内容と難易度には、大きな問題はなかったと判断できる。

第2問 太宰治「パンドラの匣」（1946年発表）は、第二次世界大戦直後の結核の療養施設を舞台に、そこで療養生活を送る主人公の「僕」が友人に向けて書き送る手紙という装いで綴られた長編小説である。出題箇所は、文芸作品の発表会に向けて、「僕」と「桜の間」の同室者たちとの俳句の創作や添削をめぐるやりとりを描いている。その心情と認識の変化を、本文の文脈に沿って読みとる力を問うことを意図した。また、本文の続きを提示し、外山滋比古の文章を副素材として突き合わせることで、登場人物の心情把握という旧来的な設問形式や、盗作を罪と見なす単純な倫理観に閉じることなく、「かっぱれ」の俳句に対する姿勢に対する「僕」の認識を相対化し、文学作品と読者の関係について多角的・発展的に読み深めることを意図した。問1、本文の読解に必要な語句の意味について、高校生には耳慣れない表現を辞書的な意味を踏まえた上で文脈の中で読みとらせる問題であり、難易度は全体として妥当であった。問2、けしからぬと酷評された「かっぱれ」に対する「僕」の心情の内実を的確に読み取らせる問題であり、大問全体の導入的問題として適切であった。問3、会話文の中に挿入された「僕」の心の声について、傍線部とその前後に着目し、傍線部に見られる表現上の特徴についての的確に理解する力を問う問題であり、適切であった。問4、傍線部に至るまでの「僕」の心情の変化を適切に捉え、「僕」が笑わずに反問した理由について、その内容を的確に読み取る力を問う問題であり、適切であった。問5、友人「君」に宛てた手紙であることを踏まえながら、傍線部に

おける「僕」の心情を的確に読み取る力を問う問題であり、やや難しくはあるが、問いのバリエーションを広げ、読みを深める問いであり、適切であった。問6、「僕」の「かっぱれ」に対する心情について、傍線部の前後に書かれた一連の流れを把握し、「僕」の心情を読み取る力を問う問題であり、妥当であった。問7、【資料】を参考にすることで、俳句に対する「かっぱれ」の姿勢に対する「僕」の認識を相対化し、文学作品と読者の関係について多角的に考察させる問題であり、適正であった。

第3問 『石清水物語』は鎌倉時代の物語であり、王朝恋物語の系譜上にある作品である。高等学校の教室で取り上げられることはなく、伊予守という武士階級が登場し最後には出家に至るという中古から中世への過渡的様相をもつものの、平安朝の物語・和歌の伝統を豊かに踏まえて物語が形づくられており、受験者の力を十分測ることのできる素材である。問題箇所は、もう一人の男主人公の中納言が木幡の姫君に思いを寄せつつも、女二の宮と結婚せざるをえなくなる場面で、微妙な男女の心理のあやを『伊勢物語』四十九段を参照しつつ、正しく理解できるかどうかを測ることができる。また和歌や王朝の風俗についての知識を確認することもできる素材である。『石清水物語』自体の分量は1,250字程度である。設問の出題意図と結果は次のとおり。問1は古文の基本的な単語や意味の知識を問うものであった。問2は文法理解を踏まえつつ、文脈を正しく理解できるかどうかを問うものであった。問3や問4は登場する諸人物の心情・言動を押さえて、問題文全体の内容を理解できているかを問う問題で、難易度は適正であった。特に問4では和歌についての理解も問うた。問5は前年に続いての新傾向の問題である。『伊勢物語』四十九段の内容を踏まえることによって、文章中盤の男君の心情の深い理解に到達できるかどうかを問うた。(i)では四十九段そのものの理解を問い、(ii)ではそれを踏まえてより深い男君の心情理解に到達できるかを問うた。古文においては、複数の先行表現を重ね合わせて深みのある表現が形づくられるのが普通である。それゆえ、古文理解においては語彙・語法の知識は必須であるが、そのみにとどまらず、古文の表現が有名作品の先行表現を関連づけつつ作られることを知っておくのも重要である。難易度は適正であった。

第4問 江戸末期の儒学者安積良斎の「話聖東(ワシントン)伝」(『洋外紀略』所収)と「君道」(君主の道)を論じた范祖禹の文章(『性理大全』所収)とを用いた複数素材問題とした。「話聖東伝」は変わった素材のように見えるが、伝統的な史書の文体で書かれた文章であり、「国語総合」で習得した知識で無理なく読み解ける内容である。また、二つの素材を比較して考えることで、漢文の教養が西洋文化を受容する際にも大きな役割を果たしたことが浮かび上がるようになっている。字数に関しては、「話聖東伝」が88字、『性理大全』が78字、問6の資料に引用された「話聖東伝」の一節が17字、合計183字(いずれも句読点を除く)であった。複数素材問題として適切な文字数である。問1は、漢文読解の基礎となる漢字の意味や対句構造の知識を問うた。問2は、字義を的確に理解し、文脈に即して短い傍線部を解釈できるかを問うた。問3は、文意にかなった返り点と書き下し文を選択させる問題である。問4は、疑問の句法を読み解けるかを問うた。問5は、比喩を解釈する問題である。問6は、漢文で頻出の語彙や句法を踏まえた文章を解釈できるかを問うた上で、二つの文章の共通点を抽出させる出題となっている。言語活動の設問を含む複数素材の出題であったが、共通テストにふさわしい問題であったと考える。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 抽象度の高い文章だが、引用を交えながら順序立てて説明がされており、論理的かつ抽象的な文章の内容を的確に読み取る力や、文章の構成・展開の仕方について考察する力を確認

する上で適切であったと評価された。問6について、生徒の言語活動を重視した学習場面が設定されており、問題作成方針に合致しているとの評価を受けたが、一方で、設問については課題点も指摘された。特に、文章を推敲する学習活動に関する設問は、修正や加筆のねらいが明瞭でないため、適切な選択肢を選ぶことが難しかったという意見も寄せられた。言語活動の学習場面を想定した問題を出題する際には、目的やねらいを明示し、受験者が設問の意図を理解して解答を導けるように配慮する必要がある。

第2問 出題本文は、「僕」の視点を中心に、その内面について丁寧に描写されている箇所であり、文学的文章を読み取る力を確認する上で妥当であるという評価を受けた。また、設問の内容に応じて選択肢数に配慮して出題されており、内容・難易度ともに妥当であったという評価を受けた。特に問7については、副素材としての【資料】(外山滋比古の文章と本文の続き)を参考にすることで、文学作品と読者との関係について考察する設問設定も妥当であり、【資料】をもとに本文の理解を深めていく学習場面が設定されており、問題作成方針に合致しているという評価を受けた。

第3問 題材、文章量、難易度、配点ともに適切であるとの評価をいただいた。出題内容としても、問題作成方針に沿っており、適切なものであるとのことであった。特に問5については、「言語活動を重視した学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。表現や用語も受験者の混乱を招くものはなく、適正であった」とのコメントをいただいた。以上を踏まえ、今後も良問の作成を目指して鋭意努力したい。

第4問 素材文の内容と分量、設問の難易度について、妥当であるとの肯定的な評価を受けた。江戸期の学者のワシントンの伝記と伝統的な儒学の君主論とを組み合わせて理解を深めるという出題に関しても、問題作成方針に合致し、授業改善の参考になるものであるとのことであった。教師と複数の生徒が対話する設定の問題については、教師と生徒のやり取りを通じて、本文の理解を段階的に深めていくような設問が望ましいという意見があった。言語活動の会話については検討を重ね、「対話的な学び」の指針となるような問題の作成にこれからも努めたい。

4 ま と め

第1問 本文を論理的に読解する力や、学習場面を想定して文章を書く力を問う設問によって、高等学校における国語科の学習過程をふまえて、大学教育に求められる基礎的な能力を評価する問いを適切に作成することができた。本文読解に係る問いにおいては、設問全体のバランスに配慮するとともに、著者の主張内容に理解が及ぶよう設問を工夫した。今後も共通テストとしてよりふさわしい問題となるよう、素材の種類や内容、問いの形式などについてさらに工夫を重ねていきたい。

第2問 本素材は、文学的文章を文脈にそって読みとる力を問うことを意図するとともに、本文の続きと副素材を提示することで、主人公の本文中の心情・認識を相対化し、多角的・発展的に読み深めることを意図した問題であった。文学的文章の複数素材問題として、本文の続きを提示するという方式はある意味、変則的なあり方であったが、内容・設問の形式・難易度ともに適切であるという比較的高い評価を受けた。文学的文章で複数素材を扱う問題形式のあり方を引き続き検討していきたい。

第3問 単語・文法などの基礎的な知識を活用し、文脈をふまえて作品を読解する力を問う設問や、複数のテキストを比べることでより深い理解を導く設問など、高等学校における古文の学習成果を適切に評価できるような問題となったと考えている。今後も入念に素材を吟味するとともに、各問の設定やリード文の工夫などによって、受験者の学力を適切に測る問題作成を心

がけたい。

第4問 複数素材の出題にあたっては、素材文の分量と注、各設問の割合を調整することで、受験者が取り組みやすくなるように配慮した。今後も素材文の検討に励み、知識を問う問題と解釈や思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランスを考え、「国語総合」で学習する内容を総合的に問う出題を目指していきたい。また、高等学校の授業改善の参考になるような、漢文学習の意義と可能性を示す問題作成を心がけたい。